



函本  
 五可思  
 譚  
 作  
 者  
 放家僧  
 二

^ 13  
 2895  
 2



2885  
8

吉  
十の  
遊  
場

吉  
子  
の  
木  
吉  
子  
の  
妻  
の  
女

門へ13  
2895  
巻 2

繪本復讐放下僧中之巻

東都 節亭山人著

第五編

小治郎秋敷条并僧与出奔条

去程に兄俊太郎の書筒駿州清見の関へ送

來ありりれ小治郎の書筒をよきと見とる

祖文一冊を虫穿の上痛死ありりりりり母

堂卒痛に空しく来ありりり始末書無

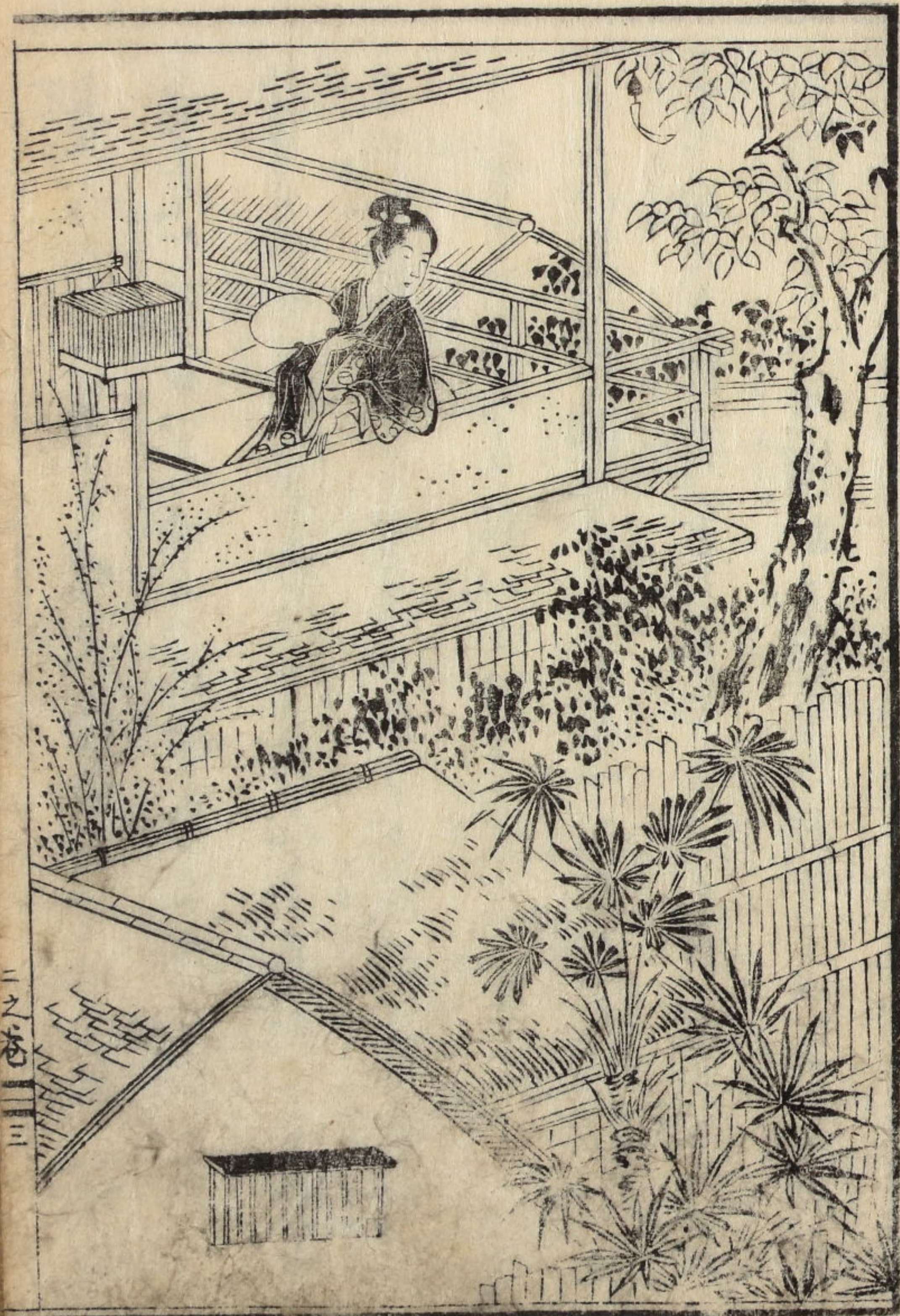
はと飯空をけすめはけり今ハ虫穿りりり



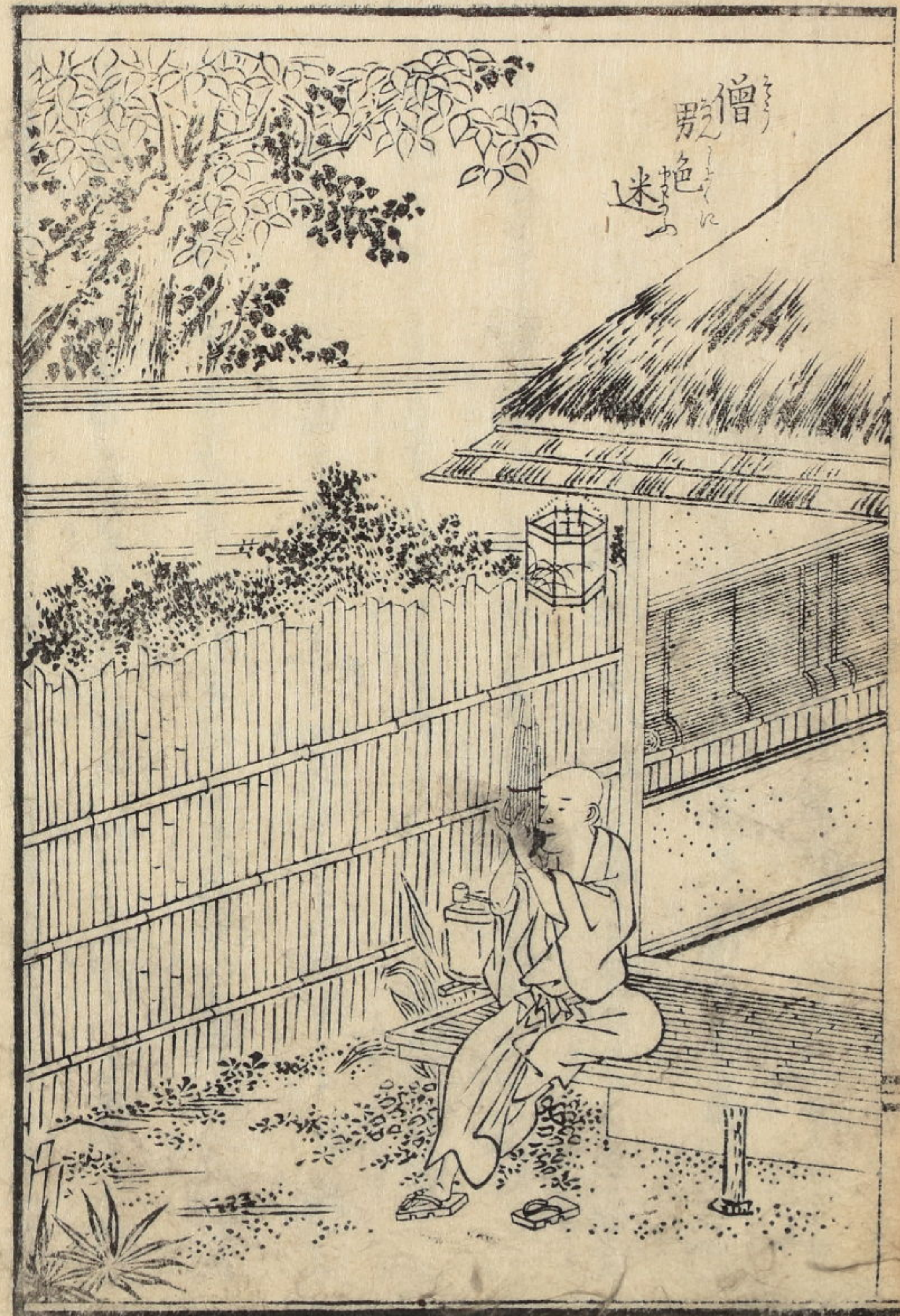
昭和九年七月五日 購末

世の暮るにんせすある世の因果歎んす  
をとりひ雨親世菩提の爲と志まぐと書載  
て彼太郎子。身雅と在々色。小治か思ひ  
志をもあけ。泣より外の子。せぬと。小治は  
かぬ。さやをあ。知んにおりの。に。  
因果とつひあがる。父上の。最の。又祖父の  
囚牢の。重と疾に過り。此身。積ぐ母上  
の。其中に。家兄ハ。出。したる。

吾ハ。あに。集と。親の。不達。も。せ。  
づ。に。今日。を。身。の。先。達。國。を。出  
し。時。母上。の。道。へ。めぐ。と。道。を。み。ひ。  
見。た。あ。と。集。と。る。か。口。流。大。上  
世。と。心。涙。たり。の。母。臥。沈。む。及。理。ふ。と  
け。上。ハ。何。と。我。古。哪。へ。り。委。し。こ。り。も。子  
家。兄。も。達。ま。く。お。り。え。と。も。備。あ。ぬ。と。ふ  
し。き。げ。を。勤。め。力。あ。ふ。甲。斐。ぬ。と。り。け。し。



二之卷  
三



僧  
迷

童が海にありて人をもせしむ此あと程く  
出づ一先古のゆゑ慈母の墓所つと糸の  
半半げりつと常しくく或時清寺に坐  
の音かゝるくねば小治の志を託す志子  
看合く點笑をふくく多ね小治の窓の戸  
を閉しぬ此僧ありひくくかきめく乃

童何とくくあつとまきくもやふく他と故寺  
此苦をすめりの色しめばがくくあ慕ふんは  
又子ぶると細くと一封の書を認め風の波  
に小治が一通づれはななく笑と看く細く  
と想をくけくく書はくくく中廿五日の夜  
藩をええくくあ洋くまらくあつて身の上を  
軍士のく巻ふのやうにあつてんねん書載り文  
小治のありひくく何人あつて可憐と好のひ

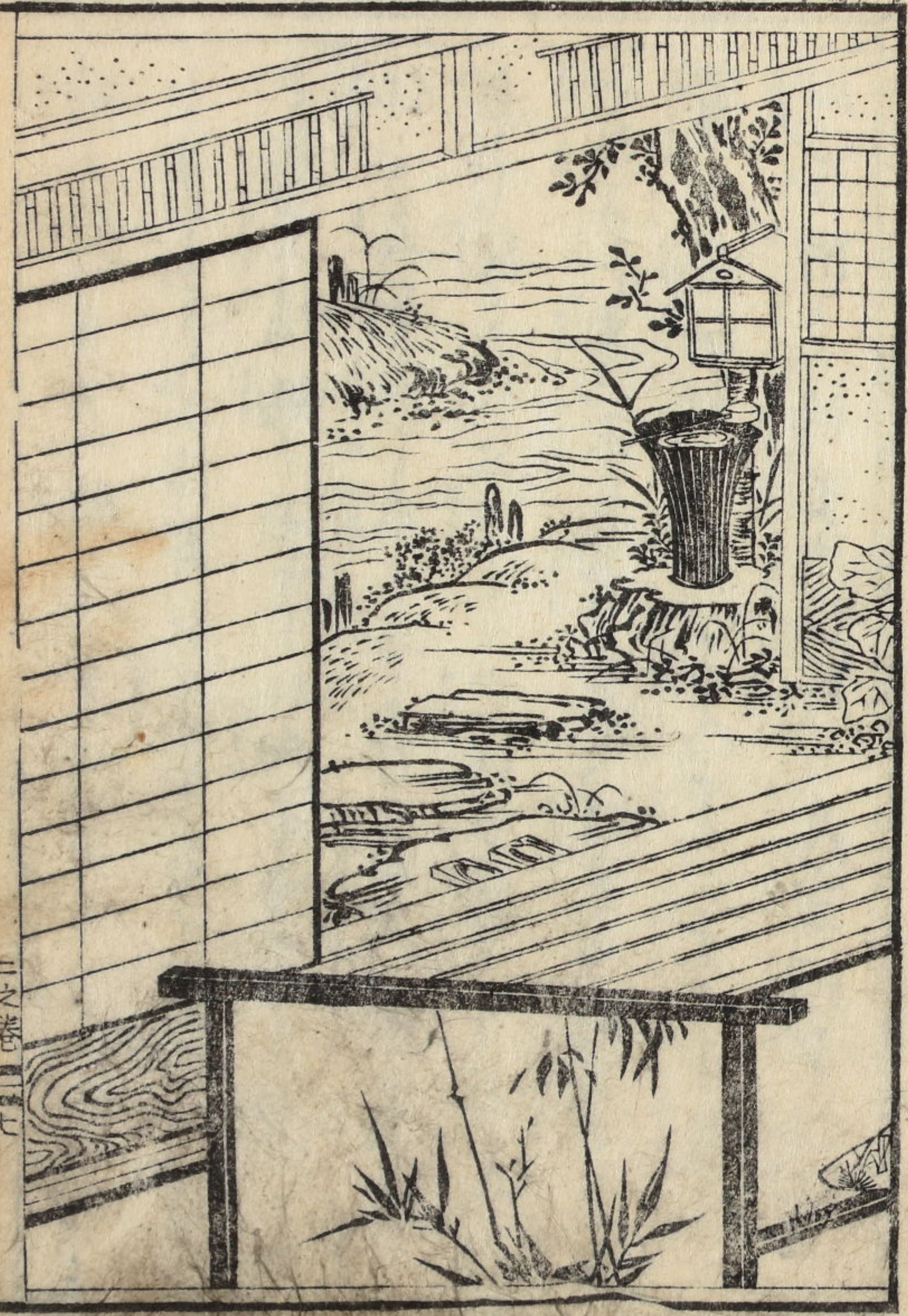
斯まが慈しむたまふるにせう修しうるまは  
あまの母あをせう。竊にゆいんと謀り折  
りし中人の情を算りてや古卿の兄故を以  
も達しあもろし。廿五日の夜を待のりて  
やがて其日に其しゆの昏黄をまじりて  
樓の窓をひらきそ看ぶやうもつ川の揚措を  
まじりてあふ靠まじり。小治郎嬉しく其れと這  
下りてれば彼僧ハ待飛く。能く遠くおて候

いとつば小治郎ハ君の後海切をうりて候と  
まじりて情をうりてをまじりてをまじりて  
あれと涙と俱にまじりてをまじりて僧小治郎  
後此所を盗りて遂に又出奔をまじりて  
あまの  
六篇に小治郎折檻条 元 頑童習条  
頃しと九月末つと僧と小治郎を足にまじり  
て逃延る時しと世にまじりておぼし

後のかこより人音の算つたに小治を敬慕て  
是ハ汝ど多々追手の者あるあらんハ  
せんとなめふらうや近く来るは快合手  
アア声にせられ逃ぐ道もあての僧ハ  
小治を捕つげつた政をもえ平して逃去せり  
小治ハやうく色に誘ふあつちうらう主の媽  
たの怒り汝大毒に換申る身をまうに素衣を  
傷し跳走をあやうり言信同断あつと衣被

を剥せ赤裸にふして緋子あつあつ幕を脱ぎ  
に赤擲あつた小治うらう小治は後かや  
のりをつまみたふら風騙されあつた  
敵のうらう詭もあつた媽の敵軍の足  
中と振上り撃んとけつた傍に在る人  
是は眼着兼くおれが媽こそ是は素衣にして  
先此つびハ鏡まぶしと素衣をぬき衣服を  
あつた髪をゆき浴衣を脱ぎ皆くつと





二之卷  
二七



僧  
走  
拵  
か  
ま

媽ははくつひくくんん 你おらごととこハ早はやくナ生意ぎをあそ  
しめんとくく小治郎こぢらうに美うとあと五い六ろ日ひ休息きゅう  
と申まを又また後ご媽ははくこううにむ向むくつあやうハ今いまより  
你おらなをそ深こくめとあらため此里こののか風かぜ義ぎをあら  
せしけ後ごわら我われぞく客きやくにわ笑わらはりあられ益ハ  
此店このより膏美びをう賣うちゆへに生な来まのた旅り人びとハ是こを  
鬻いにこ子こ細こ糸いと素すハ人ひと客きやくにまあらうく遊あそぶあらう  
此これに附つく許多たのあ樹じゆあらう凡客きやく酒さけを飲終おつて

牀とこにいくくんんとす時とき先ま客きやくをあ睡すめぬ你おらハ臉かほをあら  
せて朝あつまをあらうくあのあ枕まくらとあらせぬし  
其その時とき客きやくをあ手て延の伸のく你があ渾み身みをあ搜さがふのこ  
你おらとすこもをあらうく渠ちがあ獨ひとり下したをあ探たふす  
あらう是催め花はなしむのあ法ほうあらうあらう僧そう客きやく也なり  
佛ぶつ語ごをありひく挑子こあらう兩脚あし天てんにあ朝あのあ街まち  
をあ追おいくにあ傳たつづくはらうあらうあらうハあらうあらうて  
你おらをあらうあらうとあらう笑わら檢けんをあらう是こをあらう

齒ハ一ハくハ色ハバハサハ一ハ笑ハくハ齒ハをハあハらハふハ是ハを  
 獻ハ齒ハとハ名ハはハくハ客ハのハ好ハみのハハハ一ハ歩ハ立ハ出ハづハくハ是ハを  
 現ハ身ハとハいハふハ或ハハハ年ハのハ美ハしハとハハハまハをハ影ハアハサハチ  
 幣ハとハ弄ハすハとハハハ眼ハ角ハうハくハ人ハをハ見ハらハれハ法ハ教ハくハ  
 あハれハどハもハ次ハ身ハにハ覺ハゆハづハくハ却ハくハ客ハのハ一ハ語ハをハ  
 動ハくハ春ハ意ハをハ導ハ人ハをハ形ハとハハハどハくハ此ハらハ試ハ  
 志ハくハ望ハ良ハやハふハとハとハ詳ハふハあハらハくハ是ハハハ海ハ  
 女ハ是ハとハ軍ハ益ハ者ハはハくハくハ習ハくハ終ハくハ

頑童ウツの妙境ミョウキョウにハつハまハらハけハぬ

七篇 染之助身請条 兼 艱難之条

斯カクくハ小ハ治ハ郎ハハハ染ハ之ハ助ハ身ハ請ハ条ハ 兼 艱ハ難ハ之ハ条ハ  
 がハ美ハにハあハらハくハ誰ハもハあハらハぬハあハらハぬハ若ハらハぬハとハ此ハ門ハ  
 戸ハにハかハまハひハまハらハ人ハもハ思ハひハをハ無ハくハせハ業ハ平ハのハ  
 方ハのハ美ハ男ハはハくハ今ハ様ハ朗ハ泳ハ時ハのハ味ハ乎ハ誰ハ  
 連ハのハ慈ハとハ沙ハ汰ハにハのハとハたハらハくハあハらハぬハ座ハ配ハ  
 志ハのハ行ハ義ハとハくハ志ハふハ人ハとハ多ハのハとハくハ志ハに

西田耕左衛門とて武士原豫州の人なり  
國の影を隨て駿府の在番を勤奉配三  
に未滿しとて家産富饒ありて伊達典舊  
とて家老の娘古野とてつとを娶て妻と成  
中占登と標致人なれば智恵妙なりとて  
醜至くはくはく是ハ扱とて西田耕左衛門  
此地より來りて彼流に女をとりて軍法見聞  
に越び流に女が好色を看に密も軍に

違世よふ双ありと頑童あれば心の中を教乱  
し酒看を排ありて流に女をとりて  
あはれ此より耕左衛門流に女と恩愛日と  
つと互に力の上を流にけりて一年饒り  
ありて主人伊達若狭守更代なりて耕左衛門  
も畝國に趣んとありて流に女に別色を告  
ぎに流に女ハ悲し絶え涙をむせびありて  
耕左衛門も流に女ハ向りて

今いま你あなたをまま虫むししく呻うんんと歌歌うたぬら。你あなたがらハ  
 つつののおおややとと尋もとねねれれババ法ほう々々々々とと怪あやししくく面おもてを上あ  
 ちちとと若わかののらら又また任まかずずととつつババ耕こ左さ尉ゑい門もんををや  
 ちちりり有あ財ざいああるるとと終ついふふ法ほう々々々々にに力ちからをを償あが孫まご判ばんつ  
 連れんううつつとと法ほう々々々々をを男おとこ妻つまとと別わか業わざにに任まか居ませ  
 ししめめ妻つまのの古ふる野のがが聞きんんるるをを懼おそ合あ家けのの者ものにに言い  
 つつ事こと深ふかくく法ほう々々々々みみ減くちちとと月つき日ひののるるに  
 後あと々々。誰たれももああくく爪つめ声こゑををははくく古ふる野のがが耳みみ小



入いららふふとと法ほう々々々々とと耕こ左さ尉ゑい門もんにに列れん  
 してして一いつ月げつ斗とをを過するるとと一いつ束たば後ご墨すみををにに出でるる星  
 をを泳およ天てんををぬぬくく。ままのの早はや回まわりりととんん小こ折せりり  
 ぬぬくく。時とき六む尺じやく有あ余まのの大おほ漢かん樹じゆ陰いんよ  
 りり跳おけけりり虫むし法ほう々々々々をを拿とりりととけけ推お着しききりり  
 ぬぬくく。法ほう々々々々とと声こゑととままんんととままららハハ彼か漢かんハ  
 一いつ布ふののままめめぐぐひひをを法ほう々々々々ににかかひひ也なり天てん々々々々



青居衣を披上いばくともあく外失きし  
染みみ只虚空を行くもあけり  
を看ハ館のかき入常あは庭前樹本生  
大なるあふ火燭臺を並へ婦人君とて中  
堂に坐し涙みみ向ひあきくは你ハ何国の者  
くあを何やうあぢ涙みみあきく  
のりれろく後州清見が南へまき涙みみ  
者ろくあぢ西田耕左衛門とて人ハ馴初由別

糸一あきまきくおと傷うらぶあか  
馬慈悲を棄まつてつばま人のあき  
が女房古野とて人者くあまあを連ゆり  
あきまきをのひくあか一帯の側がだふあ  
あき面難うらも金ハ你のあをあき  
あきんあ地に拓言つてをくあき  
うらぬるあきあきあきあき  
あき古野ハ声あきく這断明ハ拓言を成す快

赤くくつらば彼大漢子流く女と地に抱翻  
靴を以てうら子今婦人の向きつるま物  
白快ちしはと悪言に罪をなすもわらうそん  
火焦まきつらちぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
若國小女取おしく大徳のに好くつら多  
くらも流く女は女中焚がぬく苦痛堪ぢぢぢ  
啊くくつ声叫びの息息ハ強へ入る良業とあ

多吞しむもぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
つら美命を助まつら流を流し手と合  
あぶ今日と紅のぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
く老婆と喚出く預くる媵は流く女がま  
少らふ部屋へ流ゆつら流く女が人相と  
看に女をあらぬまぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
你ハ前生く何の罪業をてかか磨難を  
やう人具を安し身と養時めまるとぢぢ



づゝゝ。懇に痛くねば、深く女ハ多と合点むれ  
 跡は、此若きつ、新く翌日、深く女と召出せば、  
 此も、若れ申す、形勢に、古野が、あつたら、づゝ  
 古野、大極、あ、ぬん、酒を、酒を、此一盞を、飲  
 食、主、深く、女ハ、飲、あ、つ、つ、も  
 愛の、中、平ん、バ、中、撃、ん、子、を、怕、深、く、一、盃、飲  
 飲、あ、つ、ば、古野、ハ、笑、番、あ、入、り、仕、を、琴、と、と、あ  
 素、早、く、ち、り、と、主、り、に、深、く、女、情、又、愛

して、愛、ひ、ね、あ、つ、一曲、の、藝、ハ、身、を、脚、あ、ひ  
 り、や、ま、人、の、情、り、和、ら、る、り、や、と、お、り、ふ、ん、を  
 つ、琴、不、托、憶、ち、び、か、と、あ、つ、深、く、も、ま、つ、つ、好  
 凡、音、に、其、中、の、人、々、感、入、あ、つ、興、を、傳、せ、り  
 古野、ハ、声、和、ま、ら、に、勤、め、ら、る、ま、つ、と、久、し、く  
 一、部、の、觀、音、經、を、書、写、せ、ん、と、い、ひ、が、孝、の、子  
 你、を、あ、つ、も、よ、く、つ、つ、ん、ま、つ、つ、後、置、せ、り  
 室、に、入、り、一、日、に、百、枚、の、字、を、寫、ぶ、と、い、ふ、直、に

室に於てある朝夕の口細くは運ちておぼ  
ゆるとあはれし。日暮とも出らるる終末の  
因字のあはれし。終を書写してこそが深  
熟なりひけら。うらな眼難の中にも善行  
におくは悲の申のよはれし。武運のおぼ  
あはれし。こころひらきまらちゆの善提のため  
うはあはれし。末をのりし。命とて此  
おと人するもやと心に念とて身のおぼ

お忘と晝夜勤行長にて。經書急めりなり

八篇 娘都由愛情条 并 深助浪速趣条

然に耕左郎門と古野の嵐の女子一人あり。名を都由  
と云く十四歳に生るる母の怪気嫉妬に似て。甘  
其性もあはれし。七八才の時より書を好む。賢女真心  
の乃と物に収め。ゆは優と生立あはれ。此程は  
が羨苦とらかひ着る。かあやと男の何やと  
るる艱難に遭り。ぞとあはれし。情の心頻ら



川由  
海  
幸



あつし終に戀慕の心音にはゆるゆるのやうせぬく  
此はどまにぬれまひうしわがつり琴のつら  
うゝぬの更ゆるうし中ふ馴くくせりせよあは  
甲斐もまぶるわら雅ふりおひひをばあは  
かへまわく吃し思案し本ぬの部屋を志  
のびと益を盗出し凍る物たれ結先と  
はし是抜あしにく室の戸扉と内に入るとは  
師ハ一人あはれ書志にもしも一紙をま写しなくが

此趾音に怪甚し誰とあはし言ふ系の中娘部典  
声むせあまひの尺をかこははは身よりある言  
と身自あまにけほどの母が悟るまにそあま  
お慶に遭ふ痛しけふ此圃にあしすは  
け上のりわらうも斗うたげもやううあまは  
あまのひく。後方世よあまの音をまきあつし  
おのりも人のあまを恐るあつし早くと進ま  
はるや北獄の苦患をまき天上にも至らん地



二之卷  
十九



佛力に  
追人さ  
のびる

しるべの君が後情申すは黄泉の下すでも志を  
置いどあもともあつ身世は出らぬ雌雄の睡もあ  
まじくすてふまの追の割符せと肌守を勢由にむ  
せば勢由も懐中より綿の小囊取出せば中よりハ  
何れもまろ毒の情を海なる代と互の形えとあ  
かしく其傳空をまのひ出毒蛇の口と色まろ  
ら地しく是よまろ世行まろ知らばあまろはら  
程あくま寺の鐘響くれば教をわのぐと明

くまに波も女室にあつはるよ周章駭古路く  
告るものあまろ直は能るに勢まろにゆ方を  
後もすまろあれは古野ハあまろ好く猶恐も  
あまろ教あめの捕人をかけ申らるあは殊く女ハ漸  
濱をまろと出候舟をまろ内後の方  
追手とまろと教あめの人まろとあれは女ハ  
ん角ゆと舟をまろに傳ふ天かそ曇つら風  
雨烈委砂をまろ車軸を流るまろゆ方

稻妻満ちて春動雷電轟く追手の人々  
途をさうし好む一歩も行かず終業擔籠魂懸  
土を穿ちあぐ改を地ふはる水かき其間ふ  
波々々々毎に象しおきの沖への終出た  
ふ審あふか深し人ハけらと親音後書ききたる  
おしあやと亡父その盡の守護しきりや海々  
まゝ海上以波の難も好く目を終守浪花岩に悪物  
画本復讐放下僧中之巻終

